新年謹呈

新年を迎え本徳寺を支えて下さる皆様に心より感謝する次第です。

さて嬉しいことに庫裏のお仏壇が修復される事になりました。このお仏壇は安政三年・一八五六年に造られ、一六九年間、多くの同行に維持されてきたようです。戦後は維持する世話役や同行も少なくなり、今では研修以外には使われなくなっていました。そのため、近年になって傷みが目につくようになっていました。

このような状況下、本徳寺に心を寄せるあるご門徒のご懇念により仏壇の修復をして頂く事になりました。半年かけて復元の修復を行い、その入仏式が令和七年一月一六日に関係者参集のもと、副住職の導師により執行される予定です。

今年からは新しくなったお仏壇で、しっかりとお勤めをさせて頂き、この火宅無常の中をお念仏をよりどころとして、娑婆の迷い道を信心の智慧を頂いて、生きぬいて往こうと思います。

本年もよろしくご教導ください。

仏教と科学の因果は別物

ご存じのように仏陀は因縁生起を説かれた。すべからく事象は奇跡や偶然などは存在せず現在の果は因と縁につぐまれて生ずるとされる。一方、科学の方法は対象とする現象を詳細に観察し適切な仮説を立て、その法則性を実験により精査して、信頼性のある法則を発見するプロセスを持つ。一見して両者とも同様な因果の構造をもつため、両者は同じであるとみなし、腹立しいことに仏説は全く科学的な考え方とかつてに思い込んで、仏教の説く正当性が強調される。

このような主張は世間ではよく流布され、世人も納得しているようだ。そのような話を聞く度に、科学は正しい。だから仏説も正しいとする考えはいかがなものであろうか。

なぜなら、私の科学者としての実感は相当な違和感がある。なる程、因果律は科学法則の基本原則である。しかし、その法則化は極めて限られた状況に限定され、多くの自然現象を相手に厳密に成り立つと言いきるほど甘くはない。破断現象をはじめ気候変動や地震予知にいたるまで、多くは経験知が有効であることが知られている。人間の生理現象や精神活動を始め社会や経済の現象ともなればもはや厳密な科学の方法論の適用は諦めねばならない。こにように科学が適用できるのはほんの限られた現象に過ぎない。

更に仏教の営みと科学の営みの大きな違いは、認識する主体と認識される客体の関係である。科学の場合はこの関係は交わることなくどこまでも峻別され、客体だけが認識対象となり徹底的に研究の対象となる。そこでは主体は終ぞ問われることはない。

それに対して、仏教は最終的にこの主体と客体の対立が破棄される。客体をとおして主体の有り様があきらかにされる。よく言われるように仏や浄土は主体となる人が認識する対象ではなく仏や浄土が主体である私を照らし出して私自身が明らかにされることである。

私事で恐縮だが近年感じたことを述べてみよう。昨年も何とか生きることが出来た。いろいろな社会活動や日常生活を営む上で、多くの人と関係を持ち、多くの体験をさせて頂いた。その行為の渦中にあるときは多くの支えてくれた人や状況を正確に意識することは難しい。さりとて、そのまま時の流れに身をまかすことなど、そう易々とはできるものではない。人は事をなせば他に影響を与え、必ず自分に跳ね返ってくる。

これを自業自得と人は言う。自らのなしたすべの行為＝カルマが、人知では計り知れない複雑な経緯を辿って我が身に返ってくると言うことらしい。この道理がかろうじて見えるのは、相当後になってからで、しかも分かるのは希なことである。

大半は見えないことが多いどころか、適当に自分の都合に合わせて因縁果を解釈をしてしまう。得になれば自らの努力であり、損すれば他が悪いことになる。

これに固執して抜き差し出来なくなると自業自得は自暴自棄になる。これが私の感じた因縁生起の全貌である。

本徳寺・大谷昭仁